

<実践報告>

日本の当て字と中国の当て字 —漢字教育士のための授業に関する事例報告—

久米 裕子¹

当て字とは、一般に漢字本来の意味や読み方とは関係なく、和語や外来語などに漢字を当てはめる表記を指す。当て字と言うと、単なる言葉遊びと捉える向きもある。しかし当て字の中には慣用語としてすでに定着しているものも数多くあり、その一部は「常用漢字表」の「付表」にも取り上げられており、一般の社会生活において無視できない漢字の用法である。本報告は、漢字教育士のための授業の事例報告として、筆者の授業テーマである〈訓〉に関連して、訓読みの可能性を探るべく、日本の当て字を紹介するとともに、近年の中国のSNSなどで見られる当て字を取り上げ、現代の日中の言葉の交流についても言及したい。なお日本の当て字の用例については、各種先行研究を参照し、中国の用例については、中国版X（旧 Twitter）と呼ばれる微博（Weibo）の中から選び出した。

キーワード：当て字、訓読み、漢字教育

はじめに

筆者は長年にわたって立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が主催する漢字教育士講座を担当してきた。この講座は、2011年度に開始し、白川文字学を基礎とした体系的な漢字教育の普及と教育者の育成を目指している。修了生の数は1092名に上り（2023年11月時点）、漢字教育士たちは小・中・高等学校だけでなく、日本語教育、書道教室、学童保育、カルチャーセンターなどの教育現場で活躍している（詳しくは、「漢字教育士」公式サイトを参照）。

この講座では複数の講師がそれぞれのテーマにもとづいて授業をおこなっており、筆者は漢字の〈訓〉に関する授業を担当している。本報告では、当該授業においてどのような当て字を取り上げているかを紹介するとともに、それらの当て字が、訓読みの可能性を探る上での好教材であることを確認したい。

そこでまずこの授業の背景となる〈訓〉と訓読みおよび熟字訓を含む当て字の定義について述べ、次に授業で取り上げた日本の当て字と中国の当て字について紹介し、最後にこの授業で当て字を取り上げる意義について考察したい。

なお当て字とは、一般に漢字本来の意味や読み方とは関係なく、和語や外来語などに漢字を当てはめる日本の表記法の一つである。したがって表題にある「中国の当て字」という表現は適切ではないかもしれないが、近年の中国のSNSには日本の当て字に似た用例が散見され、両者を比較する上で、

便宜上、「当て字」という表現を用いることとする。

1. 〈訓〉と当て字

結論から述べると、筆者が担当するこの授業では、当て字の多様な読み方に注目することで、漢字・漢文を〈訓む〉感覚を養うことをねらいとしている。

1.1. 〈訓〉について

漢字教育士講座における筆者の担当テーマである〈訓〉は、「訓む」あるいは「訓み」と読み、字句を解釈すること、難しい言葉をわかりやすく解説することという意味である。字句の解釈の仕方として、中国では一般に難しい漢字をわかりやすい漢字に置き換えて説明するが、日本の場合は漢字を和語に置き換えて説明することになり、こうした漢字が持つ意味に対する訳語（解釈）がやがて定着して「訓読み」となる。

このように訓読みを中国発祥の漢字に対する日本語訳であると説明すると、訓読みを漢字の意味と捉える受講生が出てくる。この理解は間違いではないが、漢字の意味（字義）と漢字の解釈（字訓）は分けて考えるべきである。字義とは、個々の漢字に固定された抽象的で一般的な意味のことで、字訓とは、ある文章や語句を構成する漢字に対する具体的かつ特定の意味のことである。たとえば「名」という漢字には、(1)名前、(2)名乗る、(3)名付ける、(4)名高い、などといった意味がある。そしてこの「名」という漢字が文章や語句の中に組み込まれると、複数ある意味の中からどれ

¹ 京都産業大学 文化学部

を採用すべきかの解釈が必要となる。日本では伝統的に漢文を訓読するので、解釈の結果として、「名」には「な」、「ないふ」、「なづく」などの訓読みがあるのである。

また訓読みと言うと、漢字にはそれぞれ固定化された正しい読み方があると考え受講生もいる。このような考えをもつのは、学校の漢字テスト対策として、「正解」を暗記してきた経験によるものであろう。学校教育の現場では、テストをおこない、成績評価をつけるため、常用漢字表に定められた（限定された）訓読みの範囲内で指導をおこなわざるを得ない。しかし、すでに述べたように、〈訓〉は、漢字に対する解釈であり、「常用漢字表」に記されていない訓読みも多数存在する。

筆者の授業では、「常用漢字表」外の訓読みを取り上げ、漢字の訓読みは固定されたものではない点を強調している。また個々の漢字の訓読みの可能性を探る具体的な手法として「連文」の活用があるが、ここで詳しくは述べない（詳しくは、加地（2010）を参照）。

なお漢字には特定の和語とかたく結びついた（漢字と和語のそれぞれの意味領域が大きく重なった）定訓と呼ばれる一般化した代表的な訓読みがある。そしてこうした定訓が成立する過程を明らかにするため、和語の語源とそれを表記する漢字の字源の対応を検証したのが白川（1987）である。

1.2. 当て字の定義

訓読みについて、もう少し述べると、漢字一字一字に対する訓読みのほかに、「明日」、「田舎」、「五月雨」、「七夕」、「土産」など、二字以上の熟語に対する訓読みもある。これらは「雨傘」、「草木」のように、漢字一字一字と和語を構成する音節が一对一の対応になっていない。このようにただちに分解できない和語一語が二字以上の漢字の連続（熟字）の読み（訓）となっているものを熟字訓と言う（詳しくは、竹浪（1987）を参照）。

熟字訓は、外見上、当て字とよく似ており、両者はともに「常用漢字表」の「付表」にその主要なものが挙げられている。文化庁のHPの「常用漢字表」の「表の見方及び使い方」には「付表」には、いわゆる当て字や熟字訓など、主として一字一字の音訓として〔「常用漢字表」に〕挙げにくいものを語の形で掲げ、便宜上、その読み方を平仮名で示し、五十音順に並べた（〔 〕は筆者加筆）とある。要するに「付表」には当て字と熟字訓がまとめて列挙されているだけで、当て字と熟字訓の明確な区分は示されていない。

各種先行研究においても指摘されるように、熟字訓は学術用語としての歴史が浅く、具体的にどのようなものを指すか定まっていなかったところがある（陳（2003）など）。柳田（1987）は、日本語における漢字表記には、(1)「正字表記（漢字本来

の意味や読み方にもとづく表記）」と(2)「借字表記（漢字本来の意味や読み方にもとづかず、主にその一方を借用する表記）」の二種類があり、後者を当て字表記の主体とみなしている。この場合、熟字訓は、二字以上の漢語（中国語由来のもの）に和語を対応させている点では正字表記に属すが、一字一字の漢字が和語と対応していないことから、当て字表記に分類されると言う。

一般に熟字訓と言うと、伝統的な読み方を指し、当て字と言うと俗語ないしは言葉遊びの延長と捉える向きがある。しかし当て字の中には慣用語としてすでに定着しているものも数多くある。たとえば「時計」という言葉は、もとを正せば、古代中国の緯度測定器（あるいは日時計）である「土圭」に対する当て字である。

笹原（2010）は、日本語におけるすべての漢字表記（正統な漢語を除く）を当て字と見る立場もあると述べ、氏が編纂した『当て字・当て読み 漢字表現辞典』では、当て字を広い意味に捉え、漢字に限定せず、ひらがな、カタカナ、ローマ字、アラビア数字や記号などによる表現までを収録しており、同種の辞典の中でも、その収録語彙数は群を抜いている。

1.3. 難読語としての当て字

笹原氏の辞典のほかにも「当て字」という名称を冠した各種辞典があるが、その内容は大きく二つに分けられる。一つは当て字と難読語を併記して、その意味や読み方などを記載した辞典であり、もう一つは当て字の語源を探り、なぜそのような読み方をするのかについて解説する辞典である。たとえば東京堂出版から刊行された『当て字の辞典』は、この内の前者に該当し、その「はしがき」に、「常用漢字表にない読み方、あるいは通常とは異なる読み方を採録した」とある。また「大半が訓読語であるが、音読語も若干ある。結果として、当て字・熟字訓と呼ばれる言葉が多いため、書名を『当て字の辞典』とした」と言う。興味深い点は、このように東京堂出版が、難読語の総称として「当て字」という用語を用いた点と、副題を「日常漢字の訓よみ辞典」として、難読語を読み解くことを「訓よみ」と総称している点である。

そもそも当て字という用語は、まず言葉（語）があって、それに対して漢字を当てるという行為、すなわち漢字による表記を創出することを想起させる。しかしたとえば「本気と書いてマジと読む」というフレーズがあるが、笹原（2011）によれば、「まじめ」を「まじ」と略するのは江戸時代から始まっており、これが1980年代に若者語として流行し、「本気」に「マジ」と振り仮名をつけた漫画から「マジ」の表記が広まったと言う。これは紛れもない当て字であるが、この場合、はじめに「マジ」という語があって、これに「本気」という漢字を当てたのか、あるいは「本気」という表記か

ら「マジ」という読みを思いついたのか、おそらく両方の側面があると考えられる。

この点について木村（2005）は、当て字という言葉は、和語が主であって、それに漢字を当てるといふ、書き手の立場に偏った用語であると指摘し、当て字研究の課題として、書き手と読み手の双方の立場から当て字を捉えるべきだ、と述べている。

1.4. 小結

当て字は日本における漢字表記法の一つで、漢字本来の意味や読み方にもとづかない「借字表記」が主なものであるが、これに熟字訓やいわゆる難読語を含める場合もある。特に日常生活においては、書き手としてよりも読み手として、当て字に触れる機会が多く、その際、読み手は、当て字における漢字の配列ではなく、その当て字の読み方により強い関心を寄せる。つまり多くの人は「マジ」という語に「本気」という漢字が当てられていることよりも、まさに「本気と書いてマジと読む」点に当て字の面白さを感じるのである。そしてこうした当て字を読み解きたいというニーズがあるからこそ、当て字に関する各種辞典が存在する。当て字を読み解くという行為はまさに当て字という漢字表記を解釈することであり、広い意味での訓読みと捉えることができるであろう。

2. 日本の当て字

日本における当て字の歴史は古く、『万葉集』の時代から、万葉仮名という漢字を用いた当て字的な用法（借字表記）が存在する。また「アテ字」という用語（概念）は中世の文献にすでに見られ、江戸時代に至って当て字文化が花開き、明治・大正時代の文豪たちも当て字をうまく使っていた（詳しくは、杉本（2018）を参照）。その後、国語施策の一環として、「当用漢字表」の注意事項に、当て字を仮名書きにすること、振り仮名は原則として使わないこと、が明記され、当て字は衰退したとも言われる（詳しくは、柳田（1987）を参照）。しかし現在では当て字は「常用漢字表」の「付表」に加えられて市民権を回復し、日常生活においても頻繁に目にする。要するに当て字とは伝統的な日本の表記法であり、多くの当て字は各時代においてははじめは違和感をもって受け止められていたが、広く使用されるようになるとその違和感は薄れ、やがて慣用語として定着していった。したがって現時点では俗な表現に感じられる当て字表記も、将来的には一般的に使われる可能性を秘めていると言える。

2.1. 当て字の用例について

本報告は、授業の事例報告であるので、まず受講生に資料を示し、次にその解説をおこなう、という形式で議論を進めたい。なお紙幅の関係上、

資料に挙げるすべての用例について解説することはしない。

2.1.1. 当て字の表記方法

〔資料〕

(1) 漢字の音訓を利用した表記

- 冗句、倶楽部
- 鯖、矢鱈、出鱈目
- 型録、見遊知会夢

(2) 漢字の意味を利用した表記

- 扉、瞳、煙草、画廊、簿記

(3) 漢字などの文字の形を利用した表記

- 弗、ぶ、金字塔

〔解説〕

笹原（2010）は、上記の分類方法において、(1)の音読みだけを用いた用例として、冗句、倶楽部を挙げ、訓読みだけを用いた用例として、鯖、矢鱈、出鱈目を挙げているが、近年、音訓を区別する意識が一般に希薄化していると述べ、その例として型録（「型」は訓読み、「録」は音読み）を挙げている。「見遊知会夢」（「見」「会」は訓読み、「遊」「知」「夢」は音読み）もまた音読みと訓読みが混在する用例である。

すでに述べたように、柳田（1987）は、当て字の多くは漢字の「借字表記」に属すとした上で、これを「借音訓表記（漢字の音訓を利用した表記）」と「借義表記（漢字の意味を利用した表記）」に分けている。ただ前者の中にも漢字の意味を生かそうとする例が多く、後者の中にも音を生かそうとする例がある、と述べている。確かに上記の(1)の「見遊知会夢」は漢字の音訓を利用すると同時に「ミュージアム」の意味を意識して漢字の意味も生かそうとしている。(2)についても、「画廊」は「gallery」の発音を、「簿記」は「bookkeeping」の発音を意識している。つまり当て字の中には、(1)と(2)のいずれに分類すべきか判然としないものも少なくないのである。

また笹原（2010）は、「音訳（借音訓表記）」と「意識（借義表記）」に加え、「形訳」という概念を打ち出している。すでに述べたように、笹原（2010）は、現代の当て字として、漢字以外の表記も取り入れており、「形訳」とは文字の形に着目して、その形に似たものを形容する表記法である。たとえば「弗」は\$マークに似ていることから「ドル」に、「ぶ」は人がボーリングの球を投げている様子に似ていることから「ボーリング」に、「金字塔」は「金」がその四角錐の形に似ていることから「ピラミッド」に当てている。このほか、人が落胆している様子をあらわす「orz」やいわゆる顔文字の類も形訳に入るのかもしれない。

2.1.2. 漢字の音訓を利用した表記

〔資料〕

- ・夜露死苦（よろしく）
- ・走死走愛（そうしそうあい）
- ・愛羅武勇（アイラブユー）

- ・愛死天流 (あいしてる)
- ・摩武駄致 (まぶだち)
- ・鬼魔愚零 (きまぐれ)
- ・仏恥義理 (ぶっちぎり)
- ・阿離我拓 (ありがとう)
- ・魔苦怒奈流怒 (マクドナルド)
- ・吐露非狩古鬱 (トロピカルフルーツ)

〔解説〕

ここでは昭和時代のツッパリ用語を「借音訓表記」の用例として挙げた(以下、本章の用例は主に笹原氏の『当て字・当て読み 漢字表現辞典』による)。一般に当て字と言うと、こうした漢字本来の意味に関係なく音訓だけを利用した表記が想起されるのではないであろうか。上記の当て字が、今後、慣用語となる可能性はきわめて低いが、「夜露死苦」は一字一音式の当て字として広く知られている。上記の用例について、興味深い点は、訓読みと音読みが混在している点と、一字一音式でありながら、「愛」や「死」などの共通の漢字を用いることで、語群全体に統一感を与えている点であり、総じて勇ましい印象を読み手に与えている。

参考までに、イラストレーターの中中英樹氏のX(旧Twitter)にアップされていた典拠不明の画像をもとに筆者が再構成した表を挙げておく(図1)。なお元の画像には「亜慰死帝流(愛してる)」、「沙亜、酢死苦慰根餌(さあ、寿司食いねえ)」などの使用例も付されていた。

我	羅	夜	魔	覇	那	駄	沙	華	亜
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
魚	璃	遊	魅	卑	尼	血	死	鬼	慰
を	り	ゆ	み	ひ	に	ち	し	き	い
云	流	世	夢	父	奴	津	酢	苦	宇
ん	る	よ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
		零	女	屁	根	帝	勢	怪	餌
		れ	め	へ	ね	て	せ	け	え
		露	喪	帆	乃	斗	訴	孤	悪
		ろ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

図1 ツッパリ五十音早見表
田中英樹氏のXのポストより

<https://x.com/japanill/status/821609716359004160?s=20>

2.1.3. 漢字の意味を利用した表記

〔資料〕

自由、社会、哲学、文化、民族、生活、法律、家庭、階級、電話、宗教、権利、自然、旅行、解決、科学、国家、個人、組織、健康、技術、時間、発明、革命、文学、経済、政府、商業。

〔解説〕

ここでは幕末から明治にかけて日本が西洋から輸入した諸概念の翻訳語を「借義表記」の用例として挙げた。「liberty」、「society」、「philosophy」など、日本語にない概念に漢字を当てて翻訳をお

こなっている。これらの漢語の中には、日本で作られたいわゆる和製漢語もあれば、中国に由来する漢語を転用したものもある。興味深い点は、これらの漢語が中国に逆輸入されている点である。王(1998)によれば、現代中国語の約7割が日本で誕生したこれらの翻訳語で占められていると言う。

なお杉本(2018)は、中国語の中で使われている漢語と、日本語の中で使われている漢語(中国由来のものも含む)を区別して、後者を「漢字語」と呼ぶべきであると主張している。

2.2. 当て字によって表記される語について

以下、和語、外来語、漢語にわけて、それぞれにどのような漢字が当てられているかについて考察する。

2.2.1. 和語に対する当て字

〔資料〕

<名詞>

- ・運命(さだめ)
- ・地球(ほし)
- ・理由(わけ)
- ・不良(わる)
- ・邂逅(めぐりあい)
- ・古傷(くんしょう)

<動詞・形容詞>

- ・伝染る(うつる)
- ・密告る(ちくる)
- ・美味しい(うまい)
- ・高価い(たかい)

<副詞(擬音語・擬態語)>

- ・失踪(ドロロン)
- ・赤面(ドギマギ)
- ・転々(コロコロ)
- ・燦爛(ピカピカ)

〔解説〕

「さだめ」という和語に「運命」という漢語を当てる例は、「地球」や「理由」などととも、曲の歌詞などでよく見かける用例である。「身体^{からだ}」、「幸福^{しあわせ}」、「生命^{いのち}」となると、当て字と呼ぶのが悩ましいほど広く一般的に使われている。しかしこれらの用例は、振り仮名がなければ当て字として成立しない。「伝染る」や「美味しい」の類に関しては、送り仮名があるため、当て字として認識できるが、「赤面^{ドギマギ}」や「燦爛^{ピカピカ}」の類になると、やはり振り仮名が必須である。このような振り仮名を必要とする当て字について、柳田(1987)は、これを純粋な漢字表記と区別し、「漢字振り仮名表記」の一つとして、「振り仮名不可欠表記」と呼んで当て字に分類している。

このほか興味深いのは、「くんしょう」に「古傷」を当てている用例である。そもそも「くんしょう」は「勲章」という漢語の読みであるが、日本語の中に浸透しているため、漢字表記を離れても

それが「勲章」であることがわかる。今野(2013)は、明治期の辞書に、「法制」を「ハフソク」、「脱走」を「シュツボン」、「外国」を「イコク」と漢語を漢語で解説している例を紹介している。

なお上記の当て字は、いずれも「正字表記」を用い、かつただちに分解できない和語に当てているため、あるいは熟字訓に分類できるかもしれない。またこれらも「本気と書いてマジと読む」類であり、和語に漢字を当てたと言うよりは、漢語に読みを当てたと言うべきかもしれない。

2.2.2. 外来語に対する当て字

[資料]

- ・命名 (ネーミング)
- ・仲間 (ファミリー)
- ・観客 (サポーター)
- ・東大卒 (エリート)
- ・愛読書 (バイブル)
- ・警告 (イエローカード)
- ・着信音 (メロディ)
- ・酒 (ガソリン)
- ・素敵 (トレビアン)

[解説]

かつての日本においては、海外から新しい文物が入ってきた際に、「^{ビール}麦酒」、「^{ステッキ}洋杖」、「^{チョーク}白墨」のように、その意味を漢字で表記したり原語の発音を振り仮名で示したりすることで、当て字は外来語の浸透に大いに貢献したと考えられる。しかし現在では海外から新しいものが次々に入ってくるという状況にはなく、かりに入ってきててもそのほとんどがカタカナで表記されている。今や外来語に漢字を当てることは稀で、既存の漢語に外来語の読みを当てるのが主流になっている。上記の当て字もその一例であり、特に言葉遊び的な用例を取り上げた。そしてこれらの用例も当て字であることを示すためには振り仮名が不可欠であり、もし振り仮名がなければ「命名」、「観客」、「愛読書」といったごく一般的な漢語として受け取られるであろう。

また前項の和語に対する当て字の用例と同様に、「ガソリン」という外来語を「酒」と表記することよりも、「酒」を「ガソリン」と読ませることに、この表記の面白さがある。つまり振り仮名によって漢字と外来語を結びつけることで、本来のイメージが増幅し、掛詞的な味わいが増すという効果が得られる。

なお既存の外来語(カタカナ語)を漢字で表記する利点として、長くなりがちなカタカナ表記をわずか数文字の漢字に置き換えることで、言葉としてのまとまりをもたせ、引き締まった印象を与える点が挙げられる。

2.2.3. 漢語に対する当て字

[資料]

- ・委縮 (萎縮)
- ・時計 (土圭)
- ・普段 (不断)

- ・楽書き (落書き)
- ・豆富 (豆腐)
- ・口撃 (攻撃)
- ・酷道 (国道)
- ・甘熟 (完熟)
- ・酔虎伝 (水滸伝)

[解説]

漢語の場合、すでに漢字による表記が存在するにもかかわらず、別表記を当てる要因として、柳田(1987)は、(1)正字表記が難解な場合に同音の簡単な漢字で表記する、(2)語形や語義が変化した場合に同音で正字表記とは別の漢字で表記する、(3)本来の意義に特別な意義やニュアンスを付加する場合に同音で異なる意味をもつ漢字で表記する、という三つのケースを挙げている。

(1)の用例としては、本来「萎縮」と書くべきところを、「委縮」の字が「常用漢字表」にないなどの理由により、「委縮」と書くようになった。(2)の用例としては、「不断」にはもともと「いつも」「常日頃」という意味もあったが、「絶え間ない」という意味で使う場合と区別するため、前者は「普段」と表記するようになった。(3)の用例としては、「豆腐」を「豆富」、「国道」を「酷道」と表記するのが挙げられる。前者は「腐」を「富」に書き換えることでイメージアップをはかるとともに、「栄養豊富」という意味も込められている。漢語ではないが、「ゴミ箱」を「護美箱」と表記するのも同様の意識によるものである。一方、後者の「酷道」については、「国道」が整備不十分などの理由により非常にひどい状態にあることを表現するために、「国」を「酷」に置き換えている。特に(3)について、柳田(1987)は、これが掛詞に似ていることから、「懸詞表記」と呼んでいる。また(2)に関しても、あるいは掛詞的な意識がある可能性もあるので、(2)と(3)は厳密には区別しがたいとしている。

(1)と(2)に関しては、すでに慣用化したものが多く、違和感なく広く受容されているため、多くの人々が当て字として意識するのは、(3)のケースであろう。場合によっては、ダジャレの一種とも言うことができる。ただその根底には、言葉の重なりを楽しむ日本の文化があり、外来語の項目でも述べた、イメージの増幅や味わいの深まりがあると言える。

2.3. 振り仮名の効用について

振り仮名が不可欠な当て字が存在することはすでに述べたとおりだが、日本において当て字が普及した要因として、この振り仮名の存在が非常に大きい。

以下、振り仮名の効用について検討するため、振り仮名の活用例として、柴田天馬の『聊齋志異』を取り上げたい。ただその前に当て字と表裏一体をなす当て読みについて確認する。

2.3.1. 当て読みについて

笹原氏の『当て字・当て読み 漢字表現辞典』は、その書名からわかるように、当て読みにも注目をしている。笹原（2010）によれば、当て読みは、江戸時代から見られる語で、「当て字の裏返しの方法として、すでに書かれている文字を当て推量で読むことは古くから行なわれていた」と言う。また「ことばがあってそれが表記される、というのが通常の筆記の順序である。しかし、日本においては、先に文字が書かれている場合に、その読みが何であるのかを考えてから、読みをあてがってみるという行為が見受けられる」と言う。また笹原（2010）は、日本では、古くから漢文資料には訓点とともに振り仮名が書き込まれてきたこと、江戸時代には、振り仮名付きの書籍が多数出版されたことについても言及している。

たとえば「所謂」^{いわれる}、「所以」^{ゆえん}、「就中」^{なかんづく}、「加之」^{しかのみならず}、「縦令」^{たとい}、「幾何」^{いくぼく}、「如何」^{いかな}、「何為」^{なんすれぞ}などは漢文に登場する漢語であり、その読みは漢文訓読に由来する。これらはまず漢字による表記があって、それに読みが与えられたと考えられる。このほか江戸時代に流行した中国の白話小説に由来する「閑話休題」や「吃驚」^{びっくり}なども漢字表記に読みを当てたケースに属すると言える。

興味深い点は、これらの漢語を和文の中で使用すれば、もはや中国の漢語ではなく、日本の漢語になる点である。つまり杉本（2018）が言うところの「漢字語」に相当する。陳（2003）も漢文資料を日本語で解釈しようとする段階で漢語と和語が結びつくが、その漢語を和文の中で用いることで、漢語と和語の関係はより緊密になると指摘している。

2.3.2. 柴田訳と小金井訳

〔資料〕

<原文>

太原王生，早行，遇一女郎，抱襖獨奔。

<柴田天馬訳>

太原の王秀才が朝早くあるいて居ると、一人の女郎が裏を抱へ、獨りで奔いてゆくのに遇った。（「画皮」『完訳 聊齋志異（復刻版）』）

<小金井きみ子訳>

秋の旦まだほのぐらきに、いたく繕ひたるにはあらで、さまよき家の窓によりて、庭の草葉にはや置居たる露の下に、かれがれになく蟲の音を、冷なる風にふかれつつ、聞き居たる若き男ありしが、やがて庭に下り編戸を開きて立いでつ。近きあたりをそぞろあるきするに、まだ往來の人もあらねば、低き聲にてからうたうち誦するほどに、後よりいそがはしく來るものありて（以下、省略）。（「皮一重」『かげ草』）

〔解説〕

これは柴田天馬（明治から昭和時代の中国文学

者）と小金井きみ子（明治から昭和時代の翻訳家・小説家、森鷗外の妹）による『聊齋志異』の翻訳である。『聊齋志異』は、清の蒲松齡の怪異小説集で、ここでは「画皮」という、人間の皮を被って人に化ける妖怪の話から引用している。柴田訳と小金井訳を比較してわかることは、創作的要素を多く含む小金井訳に比べ、柴田訳は非常に簡潔であり、その翻訳スタイルは、伝統的な漢文訓読の手法に似ているという点である（詳しくは、翁（1983）を参照）。

2.3.3. 柴田天馬と振り仮名表記

〔資料〕

<原文>

文登周生，與成生少共筆硯，遂訂爲杵臼交。而成貧，故終歲常依周。以齒則周爲長，呼周妻以嫂。節序登堂，如一家焉。周妻生子，産後暴卒。

<柴田天馬訳>

文登の周生は少い時から成生と共筆硯で杵臼交であったが、成は貧乏だったので、終歲常、周の依になり、周のほうが以齒則爲長だったから、周の妻を嫂さんと呼つてみた。そして節序には、登堂きて一家の如くに親んで居たが、周の妻が子供を生み産後暴かに卒でしまった。

〔解説〕

ここでは『聊齋志異』の「成仙」という話を取り上げる。柴田天馬の翻訳の特色について、もう少し詳しく述べると、(1)原文の漢字をそのまま用いて増減しない（漢字の差し替えも極力おこなわない）、(2)わかりやすい和訓の振り仮名と送り仮名をつける、という点が挙げられる（詳しくは、郡司（2019）を参照）。このことによって、柴田の翻訳からおおよその原文を推測することが可能になり、振り仮名がそのまま翻訳になっているため、原文の漢字表記と訳文を同時に味わうことができる。たとえば中国語を日本語に完全に置き換えて、「共筆硯（筆硯を共にする）」を「学友」に、「杵臼交（杵臼の交わり）」を「親しい仲」に訳すと、原文がまったくわからなくなり、柴田の巧みな言葉選び（解釈）が十分に伝わらなくなってしまふ。また「少」を「わかい」と読み、「卒」を「しぬ」と読むほか、「追かけ而」や「座る即」など、助字にも振り仮名をつけることもあり、柴田の原文併記を基本とする翻訳方法は、漢文や中国語を学ぶ人には大変参考になる。

2.4. 小結

当て字は日本の伝統的な漢字による表記法の一つであり、現在も頻繁に目にする表記である。また成立直後は誤用や遊びとされる当て字も、時代とともに一般化して定着するケースがある。

当て字と言うと、漢字の意味と無関係に、音読み

や訓読みを駆使した、「夜露死苦」のような一字一音式の当て字を思い浮かべるかもしれない。しかし実際には、「クラブ」という外来語に「倶楽部」という発音の近い漢字を当てるだけでなく、「俱に楽しむ部」という「クラブ」の意味に近い漢字を選ぶなど、漢字の意味を重視する傾向がある。特に既存の漢語に別の漢字を当てる場合、単なるダジャレ的な面白さに加え、新旧の二つの漢字の意味が重なり、本来のイメージが増幅される。たとえば「最高」を「最香」と表記すれば、「最高に良い香り」というようなニュアンスが加味される。当て字は、言葉の意味に深みを与えてくれると言える。

そして当て字を目にした際には、その読み(訓読み)を考えるのが当て字の楽しみ方の一つである。また当て字の中には振り仮名がないと当て字として成立しないものもあるが、漢語と和語あるいは漢字と外来語の見事なマッチングを示す振り仮名もまた、大いに読み手の目を楽しませてくれる存在である。

3. 中国の当て字

中国では古くから異民族の言語を漢字で表記してきた。また中国語は漢字の数の多さに比して、発音の種類が少ないため、同音の漢字が非常に多い。このことから既存の言葉を同音ないしは発音の近い別の漢字で表記する、いわゆる語呂合わせの文化が発達した。有名なものとして「連年有余」(「年年有余」とも)という言葉があり、これは「毎年ゆとりがある」という意味である。そして「連」と「蓮」、「余」と「魚」が同音であるため、図2のようなおめでたい図柄(吉祥図)で表現される。蓮の花と魚のほかに子供が描かれているのは、中国では伝統的には子供は多ければ多いほど幸せであると考えられ、「蓮子(蓮の実)」が「連生貴子(子宝に恵まれる)」に通じるためである。このように中国には、語呂合わせによって験を担ぐ伝統があり、同音の漢字への置き換えは得意とするところである。



図2 連年有魚

フリー画像サイト「图精灵」より

<https://616pic.com/sucai/1pkirx75m.html>

なお受講生は必ずしも中国語の知識をもたないため、授業では中国の漢字(簡体字)ではなく日本の漢字(常用漢字)を用いている。

3.1. 外来語の表記方法

〔資料〕

(1) 音訳語

- ・ 巧克力: qiǎo kè lì (チョコレート)
- ・ 咖啡: kā fēi (コーヒー)
- ・ 榻榻米: tā tā mǐ (畳)

(2) 意訳語

- ・ 熱狗: rè gǒu (ホットドッグ)
- ・ 超市: chāo shì (スーパーマーケット)
- ・ 生魚片: shēng yú piàn (刺身)

(3) 混訳語 (音訳+意訳)

- ・ 高爾夫球: gāo ěr fū qiú (ゴルフ)
- ・ 芭蕾舞: bā léi wǔ (バレエ)
- ・ 香檳酒: xiāng bīn jiǔ (シャンパン)

(4) 借形語

- ・ 社会: shè huì (社会)
- ・ 人気: rén qì (人気)
- ・ CD: xī dī (CD)

〔解説〕

外来語の分類方法について、ここでは呂・駱(2015)のシンプルな分類を参考にした。(1)は原語の発音に近い発音の漢字によって表記したもの、(2)は原語の意味をあらわす漢字によって表記したものである。そして日本の当て字同様、(1)と(2)の両方の要素を兼ね備えたものがある。たとえば「可口可乐」は、「kěkǒukělè」と発音し、コカコーラの発音に近く、また「口にすべし、楽しむべし」というコカコーラが美味しい飲み物であるという意味を与えている。

(3)は、「高爾夫球」の場合、「高爾夫」が「ゴルフ」の発音をあらわし(音訳)、「球」はそれが球技の一種であるという意味を添えている(意訳)。日本では外来語を原語の発音に従って、「バレエ」や「シャンパン」などとカタカナで表記することが多いが、中国では原語の発音だけでなく、それが「舞(ダンス)」の一種であること、「酒」の一種であることを付け加える表記が多く見られる。

(4)は、原語の表記のまま外来語として使用する表記法で、日本において中国由来の漢語を日本語の中で使うのと同じ感覚である。谷・桑本(2021)によれば、日本由来の外来語は、この借形語が非常に多く、前章で取り上げた幕末から明治にかけて日本から伝来した漢語がその大半であるが、日本由来であることはほとんど意識されることなく、これを簡体字で表記して使用している。

3.2. 欧米語に対する当て字

〔資料〕

< 国名 >

- ・ 英国: Yīng guó (英国)
- ・ 美国: Měi guó (米国)

- ・ 德国：Dé guó (独国)
- ・ 法国：Fǎ guó (仏国)
- ・ 意大利：Yì dà lì (伊太利)
- ・ 西班牙：Xī bān yá (西班牙)

<人名>

- ・ 拿破侖：Ná pò lún (ナポレオン)
- ・ 畢加索：Bì jiā suǒ (ピカソ)
- ・ 牛頓：Niú dùn (ニュートン)
- ・ 馬克思：Mǎ kè sī (マルクス)
- ・ 林肯：Lín kěn (リンカーン)
- ・ 居里夫人：Jū lǐ fū rén (キュリー夫人)

<英単語や英語のフレーズ>

- ・ 酷：kù (cool)
- ・ 派对：pài duì (party)
- ・ 狗狗：gǒu gǒu (Go!Go!)
- ・ 愛老虎油：ài lǎo hǔ yóu (I love you.)
- ・ 蜜兔：mì tù (Me,too.)
- ・ 立刻有：lì kè yǒu (I like you.)

[解説]

人名や国名など、固有名詞の場合は、漢字の発音を利用した表記(音訳)がほとんどであるが、その際、ネガティブな意味をもつ漢字は避けるのが一般的である。

また近年のSNSを見ると、漢字の発音を利用して英語の単語やフレーズを漢字で表記するケースが見られ、その際、単に同音の漢字を並べるだけでなく、まとまった一つの意味内容をもつ語(概念語)を形成しようとしている。たとえば「狗狗(ワンちゃん)」、「老虎油(タイガーオイル)」、「蜜兔(ハニーラビット)」など、原語の意味からかけ離れた概念語で表記するのがトレンドである。

なお上記の当て字の内、「立刻有(すぐに手に入る)」は少し特殊で、「立刻有」と英語の「like you」に発音の類似性はなく、「立刻有」の中国語の発音表記(ピンイン)のスペルがそのまま「like you」になっているというものである。

3.3. 日本語に対する当て字

[資料]

<借形語>

人気、腹黒、秒殺、達人、天然呆(天然ボケ)、中二(中二病)、宅男・宅女(おたく)、顔値(顔面偏差値)、萌、壁咚(壁ドン)、超○○

<音訳語>

- ・ 優衣庫：Yōu yī kù (ユニクロ)
- ・ 三麗鷗：Sān lì ōu (サンリオ)
- ・ 吉卜力：Jí bǔ lì (ジブリ)
- ・ 蘇打：Sū dǎ (菅田将暉)
- ・ 哈牛：Hā niú (羽生結弦)
- ・ 納尼：ná ní (何?)
- ・ 紅豆泥：hóng dòu ní (本当に?)
- ・ 牙白：yá bái (ヤバい!)
- ・ 抹布洗：mǒ bù xǐ (まぶしい!)
- ・ 哇酷哇酷：wā kù wā kù (ワクワク)
- ・ 阿姨洗鐵路：ā yí xǐ tiě lù (愛してる)

- ・ ○○爹斯：dié sī (~です)
- ・ ○○酱：jiàng (~ちゃん)
- ・ ○○控：kòng (~コンプレックス)

[解説]

まず借形語について、若干のニュアンスの違いがあるものの、日本の俗語がそのまま中国のSNSなどで使用されているのはとても興味深い。

次に音訳語について、以前は「カラOK(カラオケ)」、「卡哇伊(可愛い)」、「欧巴桑(おばさん)」などが有名であったが、近年、中国の人たちが日本語に触れる機会が増えたためか、SNS上には日本語の発音に寄せた新たな音訳語が多数見られる。

企業名以外に芸能人やスポーツ選手の名前に日本語の発音に近い漢字が当てられるケースもある。これは日本語で応援したいファン心理のあらわれかもしれない。また発音を寄せるだけでなく、「蘇打」は「ソーダ」の意味で爽やかな印象を与え、「哈牛」の「哈」は南方方言で「好き」という意味、「牛」は俗語で「すごい」という意味で、プラスのイメージを与えている。

上記の音訳語の中で秀逸なのは、やはり「阿姨洗鐵路」である。日本語の「愛してる」に近い発音の漢字を並べて、「おばさんが線路を洗っている」という文を形成している。原語の意味からかけ離れれば離れるほど面白みが増す。

なお「控(コン)」「ロリコン、マザコンなどの「コン」という言葉は、「コンプレックス」という欧米語からではなく、日本語経由で入ってきている点は興味深い(詳しくは、呂・駱(2015)を参照)。このほか「殺馬特(スマート)」、「馬殺雞(マッサージ)」なども、日本由来の外来語とされる。

3.4. 中国語に対する当て字

[資料]

<新たな概念語で表現する>

- ・ 霓虹金：Ní hóng jīn (日本人：Rì běn rén)
- ・ 鴨梨：yā lí (圧力：yā lì)
- ・ 杯具：bēi jù (悲劇：bēi jù)
- ・ 猪脚：zhū jiǎo (主角：zhǔ jiǎo)
- ・ 歪果仁：wāi guǒ rén (外国人：wài guó rén)
- ・ 愛豆：ài dòu (偶像：ǒu xiàng)
- ・ 神馬：shén mǎ (什麼：shén me)
- ・ 炒雞：chǎo jī (超級：chāo jí)
- ・ 肥腸：féi cháng (非常：fēi cháng)

<方言や訛りを表現する>

- ・ 偶：ǒu (我：wǒ)
- ・ 童鞋：tóng xié (同学：tóng xué)
- ・ 藍朋友：lán péng yǒu (男朋友：nán péng yǒu)
- ・ 森氣：sēn qì (生氣：shēng qì)
- ・ 花生：huā shēng (發生：fā shēng)
- ・ 黑鳳梨：hēi fèng lí (喜欢你：廣東語)
- ・ 修蛋急類：xiū dàn jí lèi (稍等一下：台湾)

語)

<漢字以外の文字で表現する>

- ・ 520 : wǔ èr líng (我愛你 : wǒ ài nǐ)
- ・ xswl (笑死我了 : xiào sǐ wǒ le)

〔解説〕

近年、中国のSNSには日本の大学や語学学校などで習う中国語では理解できない言葉があふれており、初見では意味が取れない文に出会うことがままある。その際には一旦漢字の意味から離れ、中国語の発音で音読すると「なるほどそういうことだったのか」と語呂合わせに気づくケースが多い。

上記の用例の内、「霓虹金（「霓虹」はネオンの意味）」は「日本人」の日本語の発音に寄せた表記で、「愛豆」は「偶像 (idol)」の英語の発音に寄せた表記である（ちなみに「ファン」は「飯 (fàn)」と表記する）。この二例および「520」と「xswl」を除くと、残りの用例は、すべて既存の中国語（方言や訛りを含む）に同音の漢字または漢語を当て、「主角（主役）」を「猪脚（豚足）」に、「悲劇」を「杯具（コップ）」にという具合に、新たな別の概念語に置き換えている。なぜわざわざこのような表記の書き換えがおこなわれているのであろうか。

そこには発信者の遊び心だけでなく、人と違う表現をしてSNS上で注目されたいという心理が働いていると考えられる。ひっきりなく読める平凡な文章は人目を引かず読み過ぎられる可能性が高い。そこであえて文章の中に違和感を生み出す工夫をした結果、このような当て字的な表記が生まれたのではないであろうか。

なおここで言う「訛り」とは、いわゆる「そり舌音」や「ü」が発音できない、「n」音と「l」音の区別があいまい、「f」音が「hu」音になるなど、台湾などでよく見られる中国南方の訛りを指す。また「520」は、その発音が「我愛你」に似ていることから、「xswl」は「笑死我了（死ぬほど笑った）」の発音表記（ピンイン）の頭文字を並べたもので、PCやスマホなどの短縮入力（ローマ字入力による予測変換的なもの）に使われていることから、当て字として使用されている。

3.5. 小結

以上、中国のSNS上には、英語や日本語、さらには中国語の単語やフレーズに対し、漢字の発音を利用して、元々の意味とは異なる別の概念語に置き換える、日本の当て字に似た用例が見られることを指摘してきた。

このような当て字が生まれた背景には、中国の伝統的な語呂合わせを好む精神性に加え、ネットの情報の海に埋もれないよう、既存の表現を避け、独特な表記を求めるネット社会特有の心理が働いていると考えられる。日本の俗語をほぼそのまま取り入れているのも、日本語の漢字の配列が中国の人たちの目には新鮮に映り、文章にひっきりなを生む効果があるためであろう。

また日中の当て字の違いとしては、日本の当て字は二つの意味を重ねることで、元々の言葉の意味を深める掛詞的な効果を重視するが、中国の当て字は意味を重ねると言うよりは、元々の概念とは異なる別の概念語を形成し、意味の広がりないしは意味の転換を重視しているように見える。そのため日本の場合、漢字の音訓を利用した当て字であっても、そこに当てた漢字の意味も読み手に意識させることが多いが、中国の場合は、読み手に対して、まずは当てられた漢字の発音を意識させ、そこから元々の漢字表記を連想させるケースが多いと言える。

なお中国では現代の日本の言葉がかなり受容されているのに対し、日本では現代の中国の言葉はあまり受け入れられていないように思われるかもしれない。しかし、あくまで一例にすぎないが、たとえば杪夏（2023）『キョンシー怪譚 BLOOD』というコミックには、「晚上好」、「是!」、「厲害吧!」など、中国語に日本語の振り仮名つけた表記が見られ、こうしたサブカル系のジャンルにおいて中国の時代劇や中華ファンタジーなどに対する一定の需要が見られ、言葉の交流は決して一方通行ではないことを最後に付け加えておく。

おわりに

日本では、漢字・漢文という、外国の文字・文章を自国のものにするすることで、稀に見る多彩な表記法が生み出された。そしてその表記法の一つが当て字である。また漢字は、本来、中国語を表記するための文字であるが、日本では日々当たり前のように外来の文字である漢字を使って日本語を表記している。この点において日本語における漢字表記はほぼ当て字と捉えることもできる。しかし当て字の本質は、漢字を本来の用法と異なるかたちで用いることによって違和感を生み出すことにあり、当て字が慣用化して違和感が失われれば、その当て字は当て字としての役割を終えたことになるであろう。

日本の当て字には元々のイメージを増幅させる効果があり、文芸作品はもとより、漫画の台詞や曲の歌詞、新聞の見出しや広告のキャッチコピー、本のタイトルや商品名など、限られた字数で多くのことを伝えたい時に効力を発揮している。なおここにおいても読み手に注目してもらうために、当て字が生み出す違和感が重要であることは言うまでもない。そして読み手にとっては、当て字が伝えようとしている意図を読み解く行為が何よりも楽しい。漢字・漢文を〈訓む〉ことをテーマとしている筆者の授業では、こうした行為を訓読みの延長線上に位置づけ、長い歴史の中で創出された当て字だけでなく、現代の当て字についてもその読み方を知ること、訓読みの豊かさを実感し、最終的には受講生自身が楽しみながら身の回りの

漢字・漢語に新たな〈訓み〉を見いだせるようになることを目指している。

参考文献

- 文化庁 (2010) 「常用漢字表」 https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/kanji/index.html (取得 2023.10.31)
- 杓夏 (2023) 『キョンシー怪譚 BLOOD』 講談社, 東京
- 陳力衛 (2003) 「日中両言語の交渉に見る熟字訓の形成」 『国語学』 54(3)
- 郡司祐弥 (2019) 「論説 柴田天馬『聊齋志異』 翻訳文体としての「正訳」の変遷とその特徴」 『言語社会』 13
- 加地伸行 (2010) 『漢文法基礎』 講談社, 東京
- 漢字文化資料館 (大修館書店) 「Q & A (旧版):Q0149 小学校 5 年生の教科書に「熟字訓」が出てくるのですが、「当て字」と「熟字訓」とは、どう違うのですか?」 <https://kanjibunka.com/kanji-faq/old-faq/q0149/> (取得 2023.10.31)
- 木村義之 (2005) 「あて字」 前田富祺・野村雅昭編『朝倉漢字講座 I 漢字と日本語』 朝倉書店, 東京
- 小金井きみ子 (1911) 「皮一重」 森林太郎著『かげ草』 春陽堂, 東京
- 谷奕暁・桑本裕二 (2021) 「中国語における日本語借用語としての若者ことばの語彙的特徴」 『東北大学言語学論集』 20
- 今野真二 (2013) 『漢字からみた日本語の歴史』 筑摩書房, 東京
- 翁蘇倩卿 (1983) 「日本近代文壇に於ける『聊齋志異』の受容と変容」 『国際日本文学研究集会会議録』 (学校法人) 立命館「漢字教育士」 <https://kanjikoikushi.jp/index.html> (取得 2023.10.31)
- 呂衛清・駱婉婷 (2015) 「現代中国語にみられる日本語由来の外来語：“控”の基本語化に関する一考察」 『国文学攷』 227
- 笹原宏之 (2010) 「当て字・当て読み概説」 『当て字・当て読み 漢字表現辞典』 三省堂, 東京
- 笹原宏之 (2011) 『漢字の現在—リアルな文字生活と日本語』 三省堂, 東京
- 上海季宇网络科技有限公司 「图精灵: 手绘年年有余年画娃娃造型」 <https://616pic.com/sucai/1pkirx75m.html> (取得 2023.10.31)
- 柴田天馬 (2017) 『完訳 聊齋志異 (復刻版)』 響林社, 東京
- 白川静 (1987) 『字訓』 平凡社, 東京
- 杉本つとむ (2018) 「《宛字》概説」 『宛字百景』 八坂書房, 東京
- 竹浪聰 (1987) 「熟字訓」 佐藤喜代治編『漢字と日本語 (第 3 卷)』 明治書院, 東京
- 田中英樹 (2017) 「やっと思つた。『ツッパリ五十音早見表』」 <https://x.com/japanill/status/821609716359004160?s=20> (取得 2023.10.31)
- 東京堂出版編集部 (2010) 『当て字の辞典 日常漢字の訓

よみ辞典』 東京堂出版, 東京

王彬彬 (1998) 「現代汉语中的日语“外来语”问题」 贺雄飞编『上海文学随笔精品·第二辑·守望灵魂』 中华工商联合出版社, 北京

柳田征司 (1987) 「あて字」 佐藤喜代治編『漢字と日本語 (第 3 卷)』 明治書院, 東京

Ateji (当て字) in Japanese and Chinese: A Case Study Report on a Class for Instructors of Kanji Characters

Hiroko KUME¹

Ateji (当て字) is a notation in which kanji characters are applied to words in a way that may not be related to their original meanings or readings. Some think of *ateji* as merely a kind of wordplay. However, there are many examples of *ateji* that have already been established as idiomatic words. In this paper, as a case study on a class for licensed instructors of kanji characters, some Japanese examples of *ateji* are introduced in order to explore the possibilities of “*kun* reading (訓読み)”, and some Chinese examples of *ateji* found in recent Chinese SNSs, etc., are given in order to provide a specific case of the contemporary linguistic exchange between Japan and China.

KEYWORDS: *Ateji* (当て字), *Kun* Reading (訓読み), Kanji Education

2023 年 12 月 5 日受理

¹ Faculty of Cultural Studies, Kyoto Sangyo University